学べるゲラ

第17回
絵本「しらすどん」

※2021年12月の毎日新聞記事を元にした文章です。
校閲し、直すべきところを指摘してください。

小さなシラスにも一匹一匹顔があり、命がある。そのことに気付いた神奈川県小田原市の最勝寺（さいじょうじ）朋子さんが初めて手がけた絵本「しらすどん」（岩崎書店）が、じわじわと人気を集めている。海中の透明なシラスをみずみずしく描いたこの絵本からは「生き物をいたたくこと」の意味が伝わってくる。

「しらすどん」の物語は、丼にシラスを1匹残した男の子を、丼が「まだあるよ」と呼び止めるところから始まる。男の子が耳を貸さずにいるとなぜか自分がシラスになってしまい、生ごみとして捨てられて……。

最勝寺さんは幼いころから生き物に興味があり、「何を考えているのか」と想像して、植物も昆虫も「人と同じ」と考えていた。きっかけを振り返ると幼稚園児のころにさかのぼる。家の周りが開発されて原風景が変わったことで心がえぐられるように感じたという。高校を卒業すると地域環境学を学ぶため、鳥取大学に進んだ。

その後、地域情報紙の記者として働きつつ、絵本作家の舘野鴻（ひろし）さんの教室に通って絵などを学びながら構想を練った。食事でシラスを残した人に対して友人が腹を立てたことに着想を得て、地元の身近な産物を題材にした。

制作に着手して「シラスの一生を体験したい」と考えたものの、記者の仕事を続けながらでは時間が足りず会社を辞めた。神奈川県湯河原市で早朝のシラス猟に同行

したり、スキューバダイビングのライセンスを取って海中で透明なシラスが泳ぐの観察したりした。小さなシラスにもそれぞれ顔があり、別個の生き物だということを改めて理解した。県立生命の星・地球博物館や江の島水族館などの専門家に取材もした。

命を奪うことをかわいそうだと思っていたのに、漁で網にかかり弱っていくシラスを見た時に「食べたい」という感情が沸いた。その本能のような思いに、自身も命をやり取りすることで生かされる生き物として「健全だ」と思えたという。

当初は命の大切さや食べ残しの問題定義になる作品を思い描いていた。だが、漁師から「最近はそういう問題を声高に主張する人と、命を粗末にする人とに二極化している」と言われ、「自分もバランスを欠いた『極』なんだ。正義ではない」と自覚した。「おいしく食べてほしい」と考える1次産業の現場取材を経て、最勝寺さんは「以前より今の方がシラスがおいしいと思うようになった」と話す。

絵本の紹介サイトなどで取り上げられ、記者時代に知り合った建設会社社長が「食育に役立つ」と絵本を自治体に寄付するなど読者が広がる。絵本のようにシラスになりたくて、わざと1匹だけ残す子どもいるという。